

“the darkness rushing past my breast”  
—*As I Lay Dying*における  
Dewey Dell の存在論的恐怖について—

本田 良平

福山平成大学経営学部経営学科

要旨：本論は、貧農 Bundren 一族による母 Addie 葬送の物語である William Faulkner の *As I Lay Dying* (以下 *AILD*) に登場する娘 Dewey Dell (以下 DD) を、従来よりも存在論的恐怖に深く脅かされた人物として提示する。その際、不実な恋人に妊娠させられたお腹の子供の成長を感じ、それが周囲に露見する恐怖に彼女が慄く彼女の二番目の内的独白と彼女の存在が消失したような恐怖を伴うトラウマティックな悪夢の記憶が叙述される彼女の三番目の内的独白に共通する三要素に着目する。それらは即ち、お腹の子に起因する不安、吹き抜ける (“rushing”) 黒い何か、不安が去った後 DD の側にいる弟 Vardaman である。このことを通じて、彼女の第三独白の予兆をなすような、存在論的恐怖のモチーフが色濃い場面として第二内的独白を再解釈しなおすことで、従来読まれてきたよりも存在の不確かさの不安に侵された人物としての彼女の一面を浮かび上がらせる。こうして、*AILD* においてアイデンティティの不安と存在論的恐怖のテーマを醸成する一番の要因である Bundren 家次男 Darl と DD の間に類似点を見出し、従来の批評を援用しながら、彼らの存在の不安の根源を母の愛の欠如に探りつつ、本論は、存在の不確かさを直視して発狂する Darl と、その抑圧に成功して強かに生き延びてゆく DD の対照性を指摘する。

キーワード：William Faulkner、*As I Lay Dying*

## 1. 第1章

William Faulkner の *As I Lay Dying* (1930, 以下 *AILD*) は、貧しい農民達が暮らすミシシッピ州の田舎の小さな集落に住む Bundren 家の人達が、母 Addie の遺言に従って彼女の故郷である Jefferson の街に彼女を埋葬するべく、Addie の亡骸を馬車に乗せて一家総出で Jefferson に向かう葬送の旅の物語である。Bundren 家の人達と彼らと旅先で関わる人達の内的独白のみで成り立つ特異な構成を持つこの小説の特徴の一つは、多くの批評家が指摘するように、生と死がグロテスクに混在し、生と死の境界が極めて曖昧なことである。<sup>[1]</sup> この特徴は、物語の早い段階で亡くなったにも拘わらず、まるで “It took her ten days to die; maybe she dont know it is yet” (59) という Bundren 家の娘 Dewey Dell の言葉が予見したかの

ように、あたかも自分が死んでしまったことに気づいていないかの如くに、物語の中盤で、生と死の狭間から唯一の内的独白を語る Addie に最もよく表れている。そしてこの生と死の境が曖昧であること—換言すれば、人々が確かなものと思いついでいる生は、死に脅かされ、脆く不確かなものであること—を作中でしばしば見抜くのが、Bundren 家次男の Darl である。周囲の人々から狂人ではないかと噂される彼は、千里眼を持つように遠くの出来事をその場にいるかのように見たり、他人の心の中を覗き込むことが出来る一方、“[...] I am not” (101) と、自分が存在することを確信できない苦しみを負った人物である。彼の存在の不確かさの原因を、批評家 Calvin Bedient は“Darl maintains that he has no mother, and the absence of the creator throws into doubt the reality of the created” (101) と鋭く指摘する。即ち、母が自分を愛していないことを直覚的に見抜いていた彼は、自分が存在することを保証する父と母のうち一方を欠いているように感じたことで、自己の存在を不確かにしたのである。“I don’t know what I am”(80)という言葉でアイデンティティの不安を吐露する彼は、自己というものを明確に持たず、自分自身と他者、世界を隔てる境界を持たぬが故に、容易に他人の自我の壁の内側に侵入して他者と一体化し、また自分の肉体がある所とは別の場所を見ることが出来る。このことを洞察した Bedient の言葉を再び借りれば、“it is his [Darl’s] fate to be everyone except himself” (101) なのである。そして彼が生と死の境界の曖昧さに敏感であるのは、自分が存在していること、生きていることに確信が持てないからに他ならない。このように、アイデンティティ(自己存在)の不安と、生の不確かさ—裏返せば生を脅かす死の確かさ—への意識は、分かち難い一つの問題として Darl を苦しめる。

作中において最も多くの内的独白を残す Darl が醸成するこのアイデンティティの不安と死への意識のテーマは、当然のことながら André Bleikasten ら多くの批評家達の関心を引いてきた。その際に批評家達が言及するのは、Darl、生前に“the reason for living was to get ready to stay dead a long time” (169) という父の言葉の影響で常に死を意識していた Addie、そして母 Addie の死の衝撃で精神が錯乱し、母が死んだのと同じ日に自分が捕まえた大きな魚と母を混同し、また他の兄弟と自分を較べることで自らの自己—“is”(56)—を模索することに異様な執着を示し始めることで、Darl と共に作品内のアイデンティティの不安のテーマを醸成する Bundren 家の末っ子 Vardaman である場合が多いように思われる。

本論では、これらの人物の中に娘の Dewey Dell (以下DD) を加えることを試みたい。彼女は、不誠実な恋人 Lefe との関係で妊娠し、彼に街まで行ってお腹の子供を墮ろす墮胎薬を買うことを勧められる。そんな折に、母 Addie が亡くなり彼女を埋葬しに Jefferson の街まで行くことになったので、DD は秘かに、この葬送の旅を墮胎薬を手に入れる機会にしようとしている。彼女の内的独白の中には、本論でも取り上げる自己存在の消失に関する悪夢の記憶が出てきて、アイデンティティや死の問題を論じる批評家達もしばしばその箇所を引用するのだが、その問題を DD 自身のものとするのは少ないように思われる。生の幻想性、死の絶対性が見えるために発狂する Darl と生の欲望を妄信しているがために生き延びることができる他の Bundren 家の人々というよく行われる議論の中で、<sup>[2]</sup> 特に DD は Darl を精神病院に送る役割を果たし、Darl とは対照的な人物と捉えられることが多いからか、あるいは、彼女が見る悪夢の記憶が、無意識下のもののように提示され、彼女の意識と関

“the darkness rushing past my breast”

連づかないように感じられるのが原因かもしれない。しかし本論は、この悪夢のシーンと同等のテーマを持つ場面をDDの内的独白内から読み取り、彼女を存在の不確かさ、死への意識を持った人物の一人に加えてみたい。

## 2. 第2章

DDをAddieやDarlと同様に存在の不確かさや死への意識を持った人物として読み直す際に注目したいのが、彼女の二番目の内的独白である。これは、周囲に気づかれずにお腹の子供を墮ろしたいと悩む彼女の苦境に医師Peabodyが気付いて墮胎の手助けをしてくれたら良いのにと彼女の思いで始まる内的独白である。ここでは特に、母Addieの死はPeabodyが来たせいだとの勘違いから、彼の馬車馬を鞭打って逃亡させたVardamanが家畜小屋の厩に隠れているのをDDが見つげ出す場面に注目したい。この場面で、今はまだお腹は目立たないが、やがて赤ん坊が自分の体の中で大きくなってゆく過程(“the process of coming unalone” 62)に怯えるうちに、DDは彼女を妊娠させた不実の恋人Lafeの名を我知らず口にする。するとDDと乳搾りをせがんで彼女にせつつく牝牛の間を“darkness”が吹き抜ける(“the darkness rushing past my [Dewey Dell’s] breast” 62)。

I feel my body, my bones and flesh beginning to part and open upon the alone, and the process of coming unalone is terrible. Lafe. Lafe. "lafe" Lafe. Lafe. I lean a little forward, one foot advanced with dead walking. I feel the darkness rushing past my breast, past the cow.; I begin to rush upon the darkness but the cow stops me and the darkness rushes on upon the sweet blast of her moaning breath, filled with wood and with silence.

"Vardaman. You, Vardaman."

He comes out of the stall. "You durn little sneak! You durn little sneak!"

He does not resist; the last of rushing darkness flees whistling away.

(61-62, 下線筆者)

あたいは体が、骨が、肉が分かれ広がり始めるのを感じた、一人に向かって。ひとりぼっちでなくなる過程が恐ろしい。レイフ。レイフ。「レイフ。」レイフ。レイフ。あたいは少し前かがみになって、足音を忍ばせて一歩前に踏み出す。あたいは暗闇があたいの胸を流れ過ぎ、牛を通り過ぎるのを感じる。あたいは暗闇に乗って駆け出した、けど牛があたいを引きとめる。暗闇は牛のうめく息の風に乗って流れる、木[のにおい]と沈黙に満ちて。

「ヴァーダマン。ヴァーダマンだね。」

あの子はうまやから出てくる。「このチビのこそ泥め！このチビのこそ泥め！」

あの子はさからわない。流れる暗闇の最後がひゅーっと鳴って去ってゆく。<sup>[3]</sup>

家畜小屋奥の“the broken plank” (61) から小屋の入口の方へ空気が僅かに流れている描

写があり、加えてこの場面は大雨が降る前なので風も起りやすい状態であろうから、ここでの“darkness”は、家畜小屋内の暗闇を吹き抜けた突風と解釈するのがまずは当然であろう。この突風は DD の不安が抑えきれずに一瞬のパニック状態にまで高まった様を劇的に表現する手段とも解釈できる（彼女は突風と共に駆け出そうとする）。不安に耐え切れなくなった DD は、厩に隠れていると既に気づいていたに違いない Vardaman の名をここで呼び、彼が姿を現すことで、ひとまず DD は不安を紛らわすことが出来、それに応じる形で“darkness”が吹き去る描写が出てくる。ただ、“the last of rushing darkness flees whistling away”と、それが吹き抜けてゆく様まで妙に執拗に描かれるこの“darkness”は、ただの吹き抜ける風にとどまらない奇妙な存在感を持っているように思える。

ここで、この場面における「お腹の子に起因する不安」（勿論そもそもこの要素は、DD の内的独白のそこかしこにある）、「吹き抜ける(“rushing”)黒い何か」、「不安が去った後 DD の側にいる Vardaman」の三要素に注目したい。というのも、三要素が DD の次なる第三の内的独白で再度見られるからである。第二独白と第三独白のこの三要素の類似に着目した上で、第二独白の「吹き抜ける黒い風」をもう一度解釈すれば、その異なる様相が見えてくるのではないか。

### 3. 第3章

Addie が亡くなってから 4 日目に入り、夏の暑さで棺の中の彼女の死体が腐臭を強め、また Jefferson に行くには渡らなければならない橋のかかる川も、大雨で増水して非常に危険である。こうしたことから、前夜に Bundren 家一行が一夜を過ごすべく宿一正確には家畜小屋一を借りた Samson も、Jefferson 行きは諦め、近くの New Hope の教会墓地に Addie を埋葬する方が良いと彼らに諭す。DD の第三独白は、New Hope への道の入口にある標識を Bundren 一行が再度通過する場面である。もし馬車を操る長兄 Cash が New Hope 行きの道を選び、その教会墓地に Addie を埋葬することになれば、Jefferson には行けないことになり、DD は墮胎薬を手に入れることが出来なくなる。

[. . .] *That's why they what they mean by the womb of time: the agony and the despair of spreading bones, the had girdle in which lie the outraged entrails of events* [. . .]

[. . .] They [Darl's eyes] begin at my feet and rise along my body to my feet and rise along my body to my face, and then my dress is gone: I sit naked on the seat above the travail. *Suppose I tell him [Cash] to turn. He will do what I say. Dont you know he will do what I say? Once I waked with a black void rushing under me. I could not see. I saw Vardaman rise and go to the window and strike the knife into the fish, the blood gushing, hissing like steam but I could not see. He'll do as I say. He always does. I can persuade him to anything. You know I can. Suppose I say Turn here. That was when I died that time. Suppose I do. We'll go to New Hope. We wont have to go to town. I rose and took the knife from the streaming fish still hissing and I killed Darl.*

*When I used to sleep with Vardaman I had a nightmare once I thought I was*

“the darkness rushing past my breast”

*awake but I couldn't see and couldn't feel I couldn't feel the bed under me and I couldn't think what I was I couldn't think of my name I couldn't even think I am a girl I couldn't even think I nor even think I couldn't wake up nor remember what was opposite to awake so I could do that I knew that something was passing but I couldn't even think of time then all of a sudden I knew that something was it was wind blowing over me it was like the wind came and blew me back from where it was I was not blowing the room and Vardaman asleep and all of them back under me again and going on like a piece of silk dragging across my naked legs (121-22, 下線筆者)*

時間の子宮っていうのは、これよ。拵がってゆく骨の苦しみと絶望。きつく締めたガードルの中には、[これから起きる]出来事という内臓が詰まってる[. . .]

[. . .][ダールの視線は]あたいの足もとから始まって、ずっと体にそって、顔まで上がってくると、あたいのドレスはなくなっちゃう。あたいは裸にされて、ゆっくりあるいてるらばのすぐ上の座席に座って、陣痛の苦しみだ。俺が[キャッシュに]曲がれといったとしたら。奴は俺の言ったとおりにするぞ。奴は俺が言ったようにするとお前知ってるよな?かつて、目が覚めたら黒い虚無があたいの下を流れてた。ヴァーダマンが起き上がって、窓のところへ行って、魚にナイフを突き刺し、血が蒸気みたいにしゅうしゅうとあふれ出たが、あたいには見る事ができなかった。奴は俺の言うようにするぞ。奴はいつもそうする。俺はやつになんだってやらせられる。俺ができるってお前知ってるだろ。俺がここで曲がりなよといったとしたら。あたいは、あの時に死んだんだ。俺がそうしたらどうだ。俺たちはニューホープへ行くんだ。俺たちは街に行かなくてもいい。まだしゅうしゅう血を流してる魚からナイフを引き抜いて、あたいはダールを殺した。

むかしヴァーダマンと一緒に寝てたころかつてあたいは悪夢を見たあたいは目が覚めたと思ったけど見る事ができず感じる事ができずあたいの下のベッドを感じる事ができずあたいが何なのか考えるができずあたいの名前を考える事ができずあたいが女の子だとすら考えられずあたいということを考えることすらできず起き上がりたいとも考えられずそれをすることができるよう目を覚ましてるの反対が何なのかも思い出せずすると突然何かがあるとわかりそれはあたいの上を流れる風でそれはまるで風がやってきてあたいがいないところから吹き戻してくれたみたい部屋と眠ってるヴァーダマンと全てを私の下に吹き戻してくれてシルクの一切れのようにあたいの裸の足をなでて行き過ぎていった

ここでの DD は、墮胎薬を手に入れられず、お腹の中の子供がやがて周りにも目立つようになってしまうことに怯えている。それを見透かした Darl は、“Suppose I tell him [Cash] to turn. He will do what I say. Don't you know he will do what I say?”と DD にテレパシーで語りかけ、New Hope 教会に Addie を埋葬することで Jefferson 行きの旅を終わらせ、墮胎薬を手

に入れるという DD の願いを挫折させると脅すことで、DD を精神的に追い込み苛む。直後 DD は内的独白で"Once I waked with a black void rushing under me"と述べた後に、Vardaman が 4 日前 (Addie が死んだのと同じ日) に捕った大魚をナイフで切り刻み血が吹き上がる様と DD 自身が Darl を刺し殺す極めて奇怪でグロテスクな情景を幻視し、その後彼女が昔見た、真夜中に目覚め、自分が何者であるか分からない、自己というものが消失したかのような悪夢の夜を思い出す。

DD が意識の中で見るこの幻覚において Vardaman が殺す大魚は彼がほんの 4 日前に捕まえたものなので、この奇怪なヴィジョンが"Once" (かつて) と語られる、「目覚めると黒い虚無が私の下を流れていた」と描写される夜と少なくとも直接結びつくとは考えにくい。また後者の夜の記憶において Vardaman はまだ幼く、DD は彼とその頃はまだ一緒に眠っていたと述べているので、この夜は数年前のものであることが分かる。従って、「かつて」という表現で語られる、「黒い虚無」が DD の下を流れた記憶は、直接的にはこの数年前の夜のものと考えるのが妥当だろう。ただしこの魚殺しの奇怪なヴィジョンと自己消失の恐怖の夜には"I could not see"、"I couldn't see"という暗闇の中で何も見えない感覚が共通して出てくるので、DD にとって両者が共通の要素を有していることもまた間違いない。そしてその要素は死、自己の消失 (前者は魚の、後者は DD 自身の) であるだろう。これを踏まえ、さらに前者の奇怪なヴィジョンが通常の字体で、後者の夜の記憶がイタリックスで表記されていることに注目し、本論はこの場面を以下のように解釈する。即ち、お腹の子供に関する悩みとその子を墮胎したい DD は、その自らの苦境を Darl に見透かされることをきっかけに、何らかの理由でかつての自己消失の恐怖の夜を思い出しそうになる。しかしその記憶は DD にとってあまりにトラウマティックなので、彼女の意識はその夜の記憶を直接思い出すことを避けようとし、代わりに Vardaman が捕まえた大魚とその死という極めて最近の記憶から奇怪なヴィジョンを作り出し、存在消失の恐怖のトラウマとの対峙を避けようとする。こうした DD の意識の防衛反応は、そのヴィジョンの中で彼女が Darl を殺すことにも表れているだろう。彼女は、自己存在の消失、自己の不確かさという彼女が見たくない事実を突きつけてくる Darl を想像の中で殺すのである。こうして DD は意識の表層においてはトラウマティックな夜の記憶との対峙を回避することができた一方、無意識下においてそれを思い出してしまっているのであり、それがイタリックスで表記された過去の夜の記憶なのである。

それではそもそも、ここで彼女がトラウマティックな自己喪失の夜を意識下で思い出ししてしまうのは何故なのだろう。お腹の子を墮ろしたいという願いとそれによる苦境、及び自己存在消失の記憶のトラウマの間には、これもまた死、自己存在の喪失という共通点があるが、前者は赤子のもので後者は DD 自身のものであり、ここで後者が出てくるのは少々唐突に思える。理由の一つとして考えられるのは両者の触媒になっている Darl であろう。"a nakedness powerless to hide itself behind an I" (100) (「私」の背後に自らを隠すことができない無力な虚無) と Bedient に表現される Darl は、確かな自分自身を持たず、その自己の輪郭の不確かさゆえに自他の境界に阻害されることなく作中において他者の内面の中にも侵入する。ここで Cash が New Hope 教会の方へ母の亡骸を乗せた馬車を向けてほしくない

“the darkness rushing past my breast”

と必死に願う DD の内面を Darl は容易に読み取るが、そうして Darl に見つめられ内面を見通される DD は、“They [Darl's eyes] begin at my feet and rise along my body to my face, and then my dress is gone: I sit naked on the seat [. . .]”と、自らが裸にされたように感じている。AILD における死を前にした人間存在の不確かさ、自己、「私」の脆弱さを表す作中の言葉として Bedient が注目した“nakedness”の形容詞形をここで DD が用いているのも偶然ではないだろう。赤ん坊を墮ろしたいという欲望を秘めながら母の葬送の旅を利用しようとしている DD は、それが周囲にばれないよう、彼女なりに母の死を嘆き悲しむ外向けの「私」を演じようとしている。にも拘らずここで容易に Darl にその「私」の防御幕を破られた DD は、自己の不確かさを痛感し、それが自己消失の夜の記憶へとつながったのだと思われる。

しかし、ここで DD がトラウマティックな自己消失の夜の記憶を思い出す原因は、果たして Darl に自己の内側に侵入してこられたことだけであろうか。批評家 Eric Sundquist は “Dewey Dell’s psychological merging of death and childbearing” (298) という評言で、死と子を生むことが DD の内面で混合されていると指摘しているが、この DD の第三独白においても、お腹の子に関する不安が、それを見透かす Darl の視線を介して、自己消失の恐怖の記憶へと変容している、即ち、前者が後者の引き金となっていると考えることは出来ないだろうか。これについては、以下の議論で再考したい。

#### 4. 第4章

ここまでで確認した、DD 第三独白における、お腹の子に起因する不安とその直後に出てくる存在の虚無性の具現化のような黒い闇の流れの組み合わせを念頭に起きつつ、もう一度 DD の第二独白を読みたい。

DD は、自分がこれだけお腹の子のことで悩んでいるのにそれに気付かない Peabody に焦燥感に似た苛立ちを覚える。ここで彼女は自分と他人との孤立状態を、“alone” (58-59) や、“He [Peabody] is his guts and I am my guts” (60) という言い回しで表現する。これは確かに、人に言えない (気づいてもらえない) 秘密を抱えた自分の周囲からの孤立状態を表しているだけだが、その様は、どこか結婚前の教師時代に孤独、他者との断絶にひどく苛まれた Addie を思わせる。それだけでなく、DD と Addie は両者とも、“alone(ness)”という言葉で、①「孤独」と②「(子を身ごもっている、つまり自分の中にもう一人人間がいるのが感じられる状態 [DD はそれを“unalone” (62) と表現している] と対比しての)一人」の両方を意味する使い方をしている。以下は DD の内的独白からの引用である。

It’s because I am alone(①と②). If I could just feel it, it would be different, because I would not be alone(①と②). But if I were not alone(①と②), everybody would know it. And he [Peabody] could do so much for me, and then I would not be alone(①). Then I could be all right alone(②). (58-59, 番号筆者)

続いて Addie の独白からの引用である。

I knew that it had been, not that my aloneness(①) had to be violated over and over each day, but that it (①もしくは②) had never been violated until Cash came.

(172, 番号筆者)

My aloneness (①もしくは②) had been violated and then made whole again by the violation [. . .] (172, 番号筆者)

Addie は孤独、死への意識、存在・アイデンティティへの疑念を抱いていた。<sup>14)</sup> 勿論、第二内的独白での DD とその後の DD が、これら Addie を苦しめた問題に深く意識的であったとは思えない。しかし、DD 第二、第三独白の共通三要素と、DD と Addie の類似点を意識して読むと、DD の“I feel my body, my bones and flesh beginning to part and open upon the alone, and the process of becoming unalone is terrible” (61-62) という一節は、単に、今は目立たないお腹の中の子が成長し、やがて周囲にそのことが露見することへの恐怖のみを表現するだけではないように思えてくる。この、肉体を無理やりこじ開けられ、体内に自分とは異質なもう一つの自己である赤ん坊 (“the alone”) が侵入してくるような恐怖を描いた一節は、あの孤独と性欲の問題、アイデンティティへの疑念に苛まれた Addie の独白の深遠さ、生々しいグロテスクさと、共鳴してくるように思える。

そして第三独白と同様に、この第二独白においても、お腹の子に起因する不安に DD が深く捉えられた直後に「黒い流れ」が流れ出すことに注目したい。この二つの場面の類似性を考慮すれば、第三独白の“a black void rushing under me” (121) に見られる人間個人の存在の確かさを掻き消してしまうような虚無の力 (人間の視点から捉えると、人間の存在は人間が信じているより脆弱であるという存在論的恐怖) を、第二独白の“darkness rushing past my [Dewey Dell’ s] breast” (62) にも読み取ることが出来るのではないか。そう考えると、妊娠することと自己存在の脆弱さを感じることは、Bundren 家の女性達にとっては同質のものを持っているのかも知れない。AILD における生と死の近接性、混在性は、Bleikasten や Sundquist などの優れた批評家達が指摘しているが、それは Addie の死と葬送と Dewey Dell のお腹の中に子供がいることが同時進行しているということだけではない。DD 第二独白における、女性の中に異質の自己(赤子)が侵入して女性の自己を脅かすような感覚と、妊娠と出産を自己 (“aloneness”) に対する“violation” (172) とした Addie の捉え方は同質のものであり、Bundren 家の女性にとって妊娠はアイデンティティへの信頼の揺らぎ、自己の不確かさへの気づきの切っ掛けになる側面を持っていることを示唆する。<sup>15)</sup> こうして垣間見えた自己の不確かさは、人間の自己、存在を消し去る死への気づきと地続きであるだろう。こうした不安を感じた第二独白の DD は、第三独白における自己消失の悪夢から彼女が現実に戻った際に傍らで眠っていた Vardaman のことを無意識に思い出し、この存在論的恐怖から逃れて彼女が現実と感じているものへと戻るためにここでも Vardaman の名を呼ぶのである。

結局、第二独白で DD が囚われた恐怖は第三独白のそれと本質的に同じ、即ち存在論的恐怖であり、その意味で、前者は後者の予兆と言えるだろう。このように読めば、存在やアイデンティティの不安、そして死への意識という問題に、読者が最初に感じるよりも遥



かに深く直接的に直面を強いられた人物としてのDDの姿が浮かび上がってくるのである。

## 5. 第5章

ここで一つの疑問が生じる。そもそもなぜDDは、これほどまでに存在論的恐怖に曝される人物として描かれているのだろうか。彼女が意図せぬ子供の妊娠をきっかけとしてアイデンティティの不安に苛まれたこと—この点でもDarl妊娠時のAddieの残像がDDに重なる思いがする。生まれてくる子供は大丈夫であろうか—はまだ分かるとして、彼女がトラウマティックな存在喪失の恐怖の夜を体験したのは、彼女が物語時点の現在よりさらに若かった少女時代である。後者の体験には何のきっかけもなく、彼女の素質がそれを呼び寄せたとしか言いようがない。Addieの亡骸に放火し、Gillespieの納屋を燃やした咎でDarlを精神病院に追いやったのはDDであり、共同体の中での生から追放されたDarlと、彼を追放しこれからも共同体の中で生きてゆくであろうDDは、正反対の人物のように思える。にも拘らず、存在論的恐怖を直覚する点では、DDはDarlと同等の鋭敏さ—脆弱さと言い換えるべきかもしれない—を有している。DarlとDD、そして、彼らと同じくアイデンティティの不安を感じているVardamanに共通点があるとすれば、それは何であろう。

ここで思い出されるのは、Addie唯一の独白終盤の、“I gave Anse Dewey Dell to negative Jewel. Then I gave him Vardaman to replace the child I had robbed of him. And now he has three children that are his and not mine” (176) という一節である。Addieは、DDとVardamanのことを、Whitfieldとの不倫の代償としてAnseに返済した子供であるとし、「私の子供ではない」とまで言い放っている。そしてここでAddieの言う、Anseの子であり自分のものではない「三人」の残る一人は、言うまでもなくDarlである。Addieの子であるCashとJewelは、Addie葬送の旅において寡黙ながら彼女の旅が終着に向かうのを行為を以て助けて確かな存在感を示した一方、母の愛を欠くDarl、DD、Vardamanは、(程度の差はあれ)存在の不安に曝されている。Darlを論じる際にBedientが鋭く指摘した母の愛の欠如と存在論的不安の問題は、本人達に自覚はなくともDD、Vardamanのものでもあり、AILDに大きな影を落としていると言えるだろう。

既に確認したように、Darlは、意図せず身籠った子供を墮胎せんとする意志を隠し、「母を悼む娘」としての偽りの自己を演じながら葬送の旅を続けるDDの「私」の外壁を見透かし、彼女を愚弄しつつ彼女の存在論的不安を暴きたてた。Darlのその様は、DDと同様に意図せず彼を身籠り、そして彼を愛さなかった母Addieの代理として、DDに復讐を加えているかのようなのである。しかし、このDD第三独白の場面において想像の中でDDがDarlを殺したように、DDは彼女の生きる共同体の生からDarlを退場させることで、自らの存在論的不安との致命的な直面を回避した。共に存在の不確かさを根底に抱えながら、Darlはそれを直視して発狂する一方、DDはそれを抑圧しおおせ、強かに生き延びてゆくのである。<sup>6)</sup>

本論は、平成28年度中・四国アメリカ分学会冬季大会(於 愛媛大学)における口頭発表原稿を書き改めたものである。

## 注

- 1) 本論で言及する Bleikasten や Sundquist の他には、Dewey Dell が第三内の独白の場面で “the essential unity of life and death” (68) を経験したと指摘する Fred Miller Robinson を参照せよ。
- 2) 例として Rossky 186 を参照せよ。
- 3) 原文に付した日本語訳については、阪田勝三や佐伯彰一の翻訳を使わせて頂きつつ、適宜筆者が書き改めた。
- 4) Addie が空っぽの器として夫の “Anse” という名を思い浮かべるくんだりや (173)、“It was not that I could think of myself as no longer unvirgin, because I was three now” (173) という述懐で、Cash と Darl の出産を通じて自分の体が三つになったことで、出産前の自分と出産後の自分の間に同一性を見いだせなくなったことを表現するくだりを想起せよ。
- 5) アイデンティティを個人固有の絶対的なものではなく、多くの他者との関係性の中で編み出される相対的かつ流動的なものと捉える Sundquist は、新たな他者が生じるプロセスである妊娠が Bundren 家の女性に与える影響を、“Pregnancy for Dewey Dell and for Addie involves a confusion of identity” (297) という評言で叙述している。
- 6) 発狂して共同体での生から退場する Darl と生き延びてゆく DD の対照性については、本論の原稿に対する大野瀬津子のコメントから多大な示唆を受けた。特に記して深謝の意を表したい。

## 引用文献

- Bedient, Calvin “Pride and Nakedness: *As I Lay Dying*.” *Modern Language Quarterly* 29 (1968): 61-76. Rpt. in Cox 95-110.
- Bleikasten, André. *The Ink of Melancholy: Faulkner’s Novels from The Sound and the Fury to Light* in August. Bloomington: Indiana UP, 1990.
- Cox, Dianne L., ed. *William Faulkner’s As I Lay Dying: A Critical Casebook*. New York: Garland, 1985.
- Faulkner, William. *As I Lay Dying*. New York: Vintage, 1990.
- Robinson, Fred Miller. “Faulkner: *As I Lay Dying*.” *The Comedy of Language: Studies in Modern Comic Literature*. Amherst: U of Massachusetts P, 1980. 51-88.
- Rossky, William. “*As I Lay Dying: The Insane World*.” *Texas Studies in Literature and Language* 4 (1962): 87-95. Rpt. in Cox 179-88.
- Sundquist, Eric. “Death, Grief, Analogous Form: *As I Lay Dying*.” *Faulkner: The House Divided*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983. 28-43. Rpt. in *As I Lay Dying: Authoritative Text, Backgrounds and Contexts, Criticism*. Ed. Michael Gorra. New York: Norton, 2010. 286-304.

“the darkness rushing past my breast”

“the darkness rushing past my breast”  
—Ontological Anxiety of Dewey Dell in *As I Lay Dying*—

Ryohei HONDA

*Department of Business Administration, Faculty of Business Administration,  
Fukuyama Heisei University*

**Abstract:** This study proves Dewey Dell (henceforth DD), daughter of the Bundrens who are poor farmers and carry out a funeral travel for their dead mother Addie in *As I Lay Dying* (henceforth AILD) by William Faulkner, to be a character who suffers ontological anxiety more than she has previously been thought to do. To do so, close attention is paid to three motifs which are found both in DD's second internal monologue, where she feels her embryo, whom her faithless lover made her conceive, developing and she is clutched by a fear that people may find out the secret, and in her third internal monologue, where there is a passage describing her traumatic nightmare in which she felt as if her existence was completely lost: the motifs are anxiety caused by her embryo, something black “rushing” and her younger brother Vardaman who is beside her after her fear faded away. Through this, this study offers a new interpretation of her second internal monologue as a scene morbidly characterized by a motif of ontological anxiety and as an antitype of her third internal monologue and elucidates an aspect of DD who is threatened by uncertainty of her existence more seriously than she has been thought to be. By doing so, this study finds out a similarity between DD and Darl, second son of the Bundrens who is the main cause of AILD being darkened by the theme of uncertainty of existence and that of ontological anxiety, and, drawing on the previous studies, identifies the roots of their ontological anxiety as lack of their mother's love, concluding that, while madness has ruined Darl because he lucidly perceives the uncertainty of existence, DD endures by repressing it.

**Key Words:** William Faulkner, *As I Lay Dying*

本田 良平